



発行日 ***2010年2月1日 e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

皆様からの投稿をお待ちしております

<http://www.justmystage.com/home/akutagawa/>

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870

一部50円です



土蔵

高槻の郊外をハイキングしていた時、実を枝に残した柿の木が目に入った。その横に土蔵が建っていて、ヤンチャな昔を思い出した。

暗闇の柱に紐で結ばれて、「わあーわあー」と泣きながらもがいていた。天井の窓からほのかに日が差し込んでいた。ひんやりした空気と米の匂いを強く感じた。外の音は何も聞こえない。恐怖感より腹立たしさが先走り、よけいに泣けてきた。「くそー、なんで親がこんな事をするんや！涙と鼻水がごちゃ混ぜに流れ不快になるから一層腹が立つ。父が蔵の戸を閉めて出て行ったきり誰も入ってくる気配

がない。

かなりの時間、もがいて縛られた紐を解こうとするが解けないので諦めて、誰も見ていないので泣くのもバカバカしくなって差し込む微かな光を見続けた。

蔵の一階にはモミ米が入った長持などが並び、二階には古い衣装や家具などが置かれていたのだ。火災の類焼からの防火の役割りや、ネズミの被害をなくす為の土の厚壁なのだが、いつの間にかネズミの楽園になってしまっていた。土壁に穴を開けて侵入して、箆の隅をかじっては米の餌にありつき食っていたのだ。床面には米粒より小さいネズミの糞がそこらじゅう巻き散らかしていた。

ひょっとすると一晩出してもらえないかもしれない不安がよぎり出した頃、母が重い二重になった土の扉を押し開けて「もう、悪い事はせんか」と聞いてきたので、何も答えずに大きな声で泣いてやった。母は仕方なさそうに入ってきて紐を解いてくれた。

蔵は土の塊のような建物である。米や種もみ・使い古しの道具類などが入れてあった。私の思い出の蔵は、ひんやりはしているが、何となく米蔵の匂いがする暖かい気持ちにさせる空間であった。白壁の蔵を見ると中に入っているものを想像して可笑しくなる。もうとっくの昔に、中に入れるものはなくなっているのに…。いやいや、あの暗い部屋の中に大事な家の歴史が眠ってるのかなとも思う。

遠い昔に解体された田舎の土蔵の思い出に、幾度も閉じ込められたあの暗闇と匂いが蘇り、恋しくなった。(嘉)

連載 爺捨て山④

梵店主

「金を稼いでくるから男じゃないの。稼がなくなったら、単なるゴミね」と六十過ぎのお客は、あっさりと言う。

「じゃあ、稼がなくなった男はどうすればいい？」

と訊けば、

「奥さんに会費を払ってもらってプールでも行けばいい」

要するに、男が家にいてくれたら邪魔なのだ。そういうことだろう。よくわかった。愚問だが訊いてみる。

「ご主人に愛情とか少しはありますか？」

「数十年間、一緒に暮らしてきて愛情なんか無いわよ。愛を取って情しかないわね。情、人の情よ。情はあるわよ」

迷うことなく端的に言い放つ御婦人の言葉に、私は底知れぬ怖れを感じた。

そうだったんだ。分かっていたけど、分かっていたいなかった自分を責める。甘い愛情とまでは言わないけれど、「義理と人情」の浪花節ぐらいの「女の想い」を期待してきた自分は「甘ちゃんだったんだ！」

団塊の世代と考える御婦人は、

「貧乏なんか御断りよ。金のない生活は嫌よね。夫婦喧嘩の原因はほとんどが金なのよ」

とつけ加えた。

立木理

年末から年始にかけ一週間余りを家で過ごした。かつて無いことである。行く所がなくなったのではなく、出掛ける必要がなくなった。

社会に出て三十数年が過ぎるが、この二十年近くは家に居たのは元日のみだった。とにかく仕事に出ることが当然のこととあくせくしてきた。たまたま年中無休の様な仕事に就いていたからではあるが、休もうと思えば休むことは可能だった。高い地位や多くの富を求めてそうしていたわけでは全くない。常に外に出て何かしら行動していいいと落ち着かなかつたのである。

いつも外に何かを求めていた。性分からすれば社交性があるわけでもなく、集団が好きなのでもない。むしろ一人が好きだ。それでいながら二日には仕事に出ていた。何がそうさせていたのか判然としないが、家でのもんぶり過ごすことに慣れていなかったのは確かである。いつの間にか家が安息の場と感じない人種になっていた。

ところが、この正月はうって変わって幾日も家で過ごすことになる。不思議なもので出掛ける必要がなくなると、出て

行きたいとも思わない。以前と変わりが、何処にも行きたくないくらいである。どうしたことかと訝しく思う。

自分の中で何かが変わったようだ。

大病を患うと人は変わると言うが、お蔭様で特別患ってもいない。頭髮は薄くなり、多少耳も聞こえ難く目も老眼が進行しているものの心に打撃を与えて程のものでもない。まだまだ健康だと思っているし、酒も煙草も旨い。この二つを手放すことは現下無理である。身体が心に変化をもたらしているとは到底考えられない。ただし意識(思い)と外観には大きな差があり、これが老いを感じさせることは否定出来ないけれど。

変わったことと言えば、昨秋より勤め仕事を再開したことである。そこは普段休日が少ない分正月休みは長く、日の浅い私には今の所重い責任はなく(それに応じた報酬ではあるが)、休日を押しまで出社する必要はない。ただそれだけのことで家に居るのが、これまでの様に落着きがないとか、外に何かを求めるといった衝動が生まれて来ない。何日も一つ所で過ごすことにすっかり馴染んでいる。恰もずっと昔からそうであったように違和感なく家という空間に身を置くことが出来る。

これは元々外を向く性質でなかったことを物語っているのであらう。根っこは所は一人静かに時を送るのが似合っていたのであるが、社会との関りの中で何時しか自分が変容して仕舞っていた様だ。それは、生きる為の智慧とか方便とか処世術とか呼ばれるものかも知れない。知らず知らずのうちに状況に依じて己を作り変えていた。だから今日まで生きて来られたとも言えよう。人もまたカメレオンさながらに変色する生き物に違いない。人に限って言えば、偽り欺くための変色は許されるものでないが、最低限命を保つためのものなら仕方なからう。

だが幾ら年を重ねても変わり切れないものが人には有る。持って生まれたもののなか後々身に付けたもののなか區別はつかないが、とある所(状態)や思考の原点、そこに身を置きそこに心を据える時、不思議と安堵するような「立ち位置」がある。己が己として依つてもって立つ所、これは生涯変わることなく誰の内にも存在するはずだ。そんなものは無いと言う人は、意識していないだけのことと思う。

今私は一人の時間に戻りかけている。これは一つの準備かも知れない。死への準備なのだろうか。一人で居ることが好きだった自分に帰りつつある。一人でものを思い一人で会話した

あの頃に帰りつつある。罪人は行き場を失い故郷に足向けると言うが、それに似て自分の出発点に足向けているのであらうか。始まりに自分を巻き戻し、この世での時間を顧みようとしていたのであらうか。無意識のうちにそこへの回帰が始まっている。

己のスタート地点に立ち返り、これまでとは違う姿を描いてみたいものだ、もう少し時間が残っているのだから。一度出かけ再び戻る、また出かけたまた戻る。息切れるまで繰り返すことになるう。



夏山合宿 南アルプス1

梵店主

谷川が流れ、河原で倒木を集めてマキを焚き炊事ができるひと気の無いところ。近くに岩登りや雪上訓練ができそうな雪渓があればいい事なしの、われら山男の桃源郷である。

これらの条件を満足させてくれるところは意外と少ない。国立公園内では禁止されているからマキで焚き火をして

もいい場所はない訳である。ひと気の少ない山域といえども人気の無い地域ということになる。これらもろもろの事柄を考えて山域を探すのである。

薄暗い部屋の中で国土地理院の五万分の一の地図を広げて探す。数箇所に見星をつけるが、桃源郷の要件を欠く。雪渓が無かったり、テントが張れそうでなかったり、焚き火ができない、岩場がない等。これだけ広い日本の山の中に桃源郷はすでに消えていたのかと意気消沈した。

幾日か地図と睨めつこしたある日、後輩の一人が「ここはどうですか」と南アルプスの谷の出会いを指差しながら言った。「聖岳の西側に流れる二つの谷が

合流する西沢渡、ここならアプローチも長いからひと気も少ないにちがいない。

谷筋だから焚き火も出来る、岩魚を釣って塩焼きを食べられるかもしれない。岩場は無いが谷を遡行して滝を登ればおもしろい、雪渓も無いが剣の雪

渓で短期間雪上訓練をすれば問題は無い。よっちゃんは「よしここなら我々の憧れの地になるかもしれない」と思った。学生生活最後の夏山のベースキャンプは誰も来ない我らだけの別天地であつて欲しい。山を好む奴は人混みが嫌いなのである、人を避けて山に入るわけだから、出来れば静かなところがいい。

剣岳の剣沢で短期間の雪上訓練をした後、よっちゃんたちは南アルプス・西沢渡へ向かった。富山から糸魚川を経て塩尻、そこから飯田線に乗り平岡駅で降りる。食料を調達して車で梨本まで送ってもらいキャラバンがはじまる。山あいの谷を大きなリュックを担いだ十人が歩く、人があまり歩いていない感じの狭い谷底の道が続く。天竜川となる遠山川がはるか下に流れているが見ることは出来ない。川の音から水量がさほど多くはなさそうである。水量が多ければテントを設営するにしろ、谷を遡行するにしろ難しくなるから一安心である。

およそ二〇キロ足らずの道を歩いた先に、地図で探した我らの桃源郷・西沢渡があつた。想像したとおりの秘境

である。人の気配が感じられず谷に架けられた丸太の木の橋も水で流されたままの姿で我々を迎えてくれた。早速テントを河原に設営して十日間の沢登りの偵察を行なった。鉄

砲水のことも考えなければいけないが、寝心地のこともあるので岩陰の石ころの上に草を敷き二張りのテントを張る。谷の水もきれいだし、焚き木となる木も沢山ある、通行する人もいない。山菜も沢山ありそうだ。岩魚もいそうだ。塩焼きで食するの

も夢ではない。

次の日から、西沢、東沢、奥燕沢、燕沢のそれぞれの沢を登り稜線へ出て聖平を経由して西尾根を走って降りてくる計画を行なった。これらのルートは資料が少なく我らには未踏の谷であつた。よっちゃんはザイルとハーケンを持っておれば何処でもいける自信があつたので、不安よりも、知らない未知のルートへの胸のときめきが強かつた。しかし、西沢を登っていた時のことである。いくつかの滝を登り谷の中腹に来た時、眼前に大きな滝が現れた。よっちゃんは滝を避けて高巻くことをせず

に滝を直登しようとした時のことであつた。トップで登り始めたよっちゃんは一〇メートルほど垂直な滝を登った時に不安になって、ハーケ

ンを打つ岩の割れ目をさがすがボロボロの岩ばかりで、ハーケンを打つても効きそうな岩が無い。仕方がないので岩の割れ目に気休めにでもなるかと思ひハーケンを手で差し込んだ、次の瞬間あつという間に下の滝つぼに落ちた。幸い怪我もなかったが、一寸した気の緩みが事故を招くものだ。

休養日は山菜取りと岩魚釣りを皆でした。山菜を煮込み佃煮にしたり、岩魚を釣り塩焼きにして皆で食べた。そんな具合だから皆ドンドン食べる、その結末が実におもしろい。

楽しい沢登りの合宿を終えて、北岳までの縦走に出発する日のことである。テントをたたみ荷作りをする最中に、食料担当の二年の山猿がリーダーであるよっちゃんに近づいてきて「米がありません。食べ過ぎてしまったようです」という。えっ、食料がない。それ困ったなあ。「ここから買出しに行けば二日かかる、北岳では岩登りに参加するOBとの約束がしてあるから予定を遅らせない」。部員たちが、よっちゃんの周りに集まってくる。こんな事は初めてであつた。みんなが食べたわけだから食料担当だけを責めるわけにはいかないのだ。



初めての通夜法要

私は門徒様のおすすめと姑の応援で法務のお勤めをする事になったのですが、昭和二十年代の頃は、法務にたずさわる女性は庵主さん以外ではあまり見られませんでした。

赤ちゃんのおとなしい時間の合間をぬってお勤めに出かけたものです。はじめは戸惑ってしまいましたがたびたびありました、だんだんタイミングよくできるようになりました。

日々の家事、子育てを追われながらも、役所勤めの住職を助けるために寺務と法務をこなしたものです。

初めてお通夜の法要をつとめた時のことです。街から疎開してきてそのまま住みついたお家から、檀家さんではないのですが、「お年寄りが亡くなったので、お葬式をして欲しい」とご依頼がありました。役員一同はさっそく村の集会所に集まって翌日の葬儀の準備を整え、墓地に穴を掘ります。その時代はまだ土葬だったのです。

母から「あなたは今夜お勤めにいつてね。あすの葬儀、埋葬は住職がお供するから」といわれ、お通夜の法要を皆さんと一緒につとめました。我ながら心もとないお通夜の法要でした。

私は女学校時代、校長先生が亡くなられた時に生徒代表で、親鸞さんの「正信念仏偈」を唱えたことがあったのです。そのことを思い出して、母からも

「お勤めは正信念仏偈よ。お通夜はしめやかにね」といわれ、黒白の幕の下がったお家の中に入りました。

薄暗い家の中はお参りの方々であふれんばかりです。ご遺族が私のために座布団を敷いて下さり、慣れない私は勝手わからぬまま神妙に念仏を称え、合掌し、リンを打ち、「正信偈」を发声します。私の読経にあわせて、おむろに参詣者の中から声がもれてきました。二人、三人から次第に読経する声が増えてきます。皆さん一人一人神妙に礼拝し、お勤めはとどこおりなく進み、三十分ほどで終わりました。終わりの偈に近づいてくる頃には皆さんが合唱し、最後のお念仏は大きな声で一丸となって称えていただきました。

仏様は享年九十歳の大往生でした。お参りさせていただきながら「結構な仏様ですよ」とおばあちゃんに声をかけて、退座いたしました。

初めて経験するお通夜のお勤めでしたが、はじめの心配はよそに案外スムーズにとめることができました。このお勤めはたいへん印象深く、いつまでも思い出として心に深く残っています。

大阪に嫁いで間もない頃、誰にもいえない失敗談があります。

当時は家の周りは田圃ばかりでした。田圃の脇にはリヤカーが通れるくらいに狭いあぜ道があります。ある夏の日のことです。

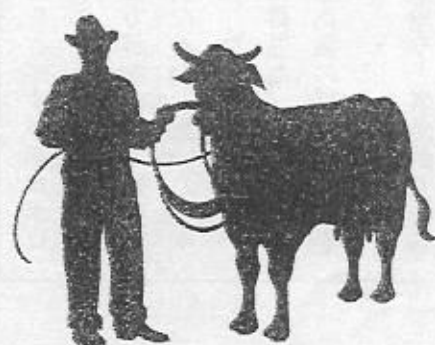
私が自転車に乗ってあぜ道を走っていたとき、先方から牛を引いた農家の方が見え、自転車を降りて脇で牛が通り過ぎるのを待つのが無難なと思い、自転車から降りかけると、農家の方が「牛をしつかりもっていますから、降りないでそのまま乗って行ってください」と親切におっしゃったのです。「そうですか、お言葉に甘えて通らせていただきます」と言いながら、牛のそばを通りかけますと、あちらを向いていた牛さんが急に私の方を向いて、私にあたったのです。ビックリした私は、自転車のハンドルをもったままの姿勢で横倒しになり、青田の中へ

どんぶりこ。田植えがすんだばかりの田圃へ勢いよくはまっつてしまいました。頭から泥を被って外出着も泥だらけ。泣くに泣けないこの気持ち。

牛を引いていた小父さんのあわてたこと、あわてたこと。なにしろ狭い農道で牛を手放せないのです。「牛を小屋に置いてきます」といって、その場から去ってしまったのです。

残された私は、自転車を起こして、泥んこのまま我が家の井戸端へ直行しました。法務がひかえていたのです。ぐずぐずしていられません。顔を洗って、お勤めに出かけました。

六十年も経った今でも、あの時のショックは忘れられない思い出です。あの時のお牛の大きな眼と鼻ははっきり覚えています。とても怖かった。主人に話を聞いて、二人で大笑いしたものです。その主人も浄土に往って久しい。



「エヴェレスト」という山 (3)

科野 山猿

「エヴェレスト」登山に入る前に、アルピニズムの歴史を振り返っておきましょう。

そもそもアルピニズム、近代登山とは何なのでしょう。ごく簡単にいつてしまえば「山登りそのものを楽しむ登山」です。山に登る衝動は未踏のピークへ向います。そこには冒険というたいへん重要な要素があります。この登山という新しいスポーツがヨーロッパ・アルプスを舞台に始まるわけです。

近代以前は、狩猟のためとか、峠を越えるため、領土確認のため、鉱物を採るためというように、必要に迫られたり、目的があつて山に登りました。日本では、国見のために山に登った歌が万葉にありますし、七世紀には山岳を遊行する修験者が出現します。近世になると、講を組織して富士山、御岳などの霊峰に登る登拝が盛んになります。修験道も登拝も宗教的な営みであり、山登りそのものを楽しむ登山とは違ふ。ですが、講中登山なんかは物見遊山的なところがありますので、近代登山の萌芽ととらえることもできます。じつさい木暮理太郎という明治のパイオニアは講中登山から近代登山に

山から神秘性をはぎ取ってたんなる物質になるところから始まるという桑原さんの説を紹介しましたが、日本の近代登山の場合は必ずしも当てはまらないのではないかと思います。それは桑原さんも指摘しています。

近代登山の始まりについては、諸説あります。

古くは十四世紀のイタリアの詩人F・ペトラルカがあげられます。「彼こそアルプスの峰に登ろうとした最初の人ではなからうか」というのは、ドイツの哲学者O・シュペングラーです。ペトラルカは一三三五年、フランスはプロヴァンスのモン・ヴァントー(一九〇九巴に、弟ジェラルドとともに登りました。苦しい登山中に会った老羊飼いは、危険だから登山を思いとどまらせようとするのですが、ペトラルカ兄弟はその危険を冒して登りつづけるのです。登山中の出来事を楽しみながら、ついに頂上に達します。頂上に立つて目の当たりにした美しいパノラマにペトラルカは感動するのです。

時代はさらに下って十六世紀、スイスのコンラート・ゲスナーこそ、近代登山の嚆矢だという人もいます。彼は「神が自分に生をあたえつつけるかぎり山に登ろう、どんなことがあつても一年に一山登ろう」と決意していました。友人のF・マルティとともに多く

の山に登り、山を愛したのです。マルティは「山の頂にあるときはど幸せなことはない。山を歩くこと以上に高価な散歩はない」といっています。

ゲスナーは、登山の草分け的存在というよりも、神学から書誌学、言語学、動物学、植物学までさまざまな学問分野にわたって偉大な功績を残していることで有名です。また、医師としてペスト撲滅に献身し、自らペストの犠牲になるのです。この博学多才なゲスナーに憧れ、「ゲスネルの如くなるべし」という志を立てたのが、あの博覧強記の奇人博物学者、南方熊楠です。

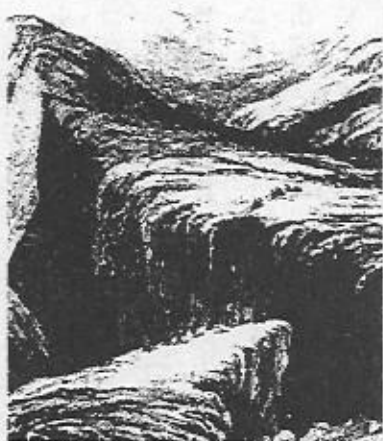
ペトラルカからゲスナーのヨーロッパはルネサンスの時代でした。アーノルド・ランは著書『登山百年史』のなかで、探検家でもあり美術評論家でもあるM・コンウェイの言葉を引用しながら、次のようにいいます。

ルネサンスとともに山の絵画が衰えました。十六世紀が進むにつれて、山岳美を認識して山を正確に再現する画趣は失われ、山への情熱が衰えた。それは、ルネサンスはギリシアの人文主義にもどることであり、ギリシア人の自然にたいする態度を復活させたからです。

人本主義というのは、「万物の尺度は人間である」という古代ギリシアの哲学者ピタゴラスの言葉があらわすよう

に、ギリシア人は人間の役に立つ自然か、目的達成のための手段としての自然にしか興味を示さなかった。ですから、山や海は好まず、飼ひ慣らされた自然を愛したわけです。彼らは限界のないものに本能的に恐れられたので、山頂から眺める遙かな地平線に心から不快を感じたのです。そんなルネサンスの時代のなかで、ゲスナーは例外的な存在といえるでしょう。その後、十八世紀半ば頃までアルプスの山々は顧みられることはありません。

アルプスの静寂が破られるのは一七六〇年です。オラース・ベネディクト・ド・ソシュールというジュネーブの著名な自然科学者が、アルプス最高峰モンブラン(四八〇七巴の初登頂者に賞金を出すと発表するのです。しかし、賞金を獲得しようとするものはあらわれませんでした。モンブランはアルプスの龍に護られていて、その龍を見たことがあるという多くの目撃談があつたからです。この龍というデーモンをモンブランから追い出すのに一五年かかりました。



モンブランのタコス氷河に登る

モンブラン登頂がはじめて試みられるのは一七七五年です。M・ブーリという画人や村医者、M・バツカール、またド・ソシユール自身もモンブランの山頂を目指して、動きはじめます。初登頂はそれからさらに一年後の一七八六年、バツカールと水晶採りのガイド、J・バルマによって成し遂げられました。

十八世紀後半から十九世紀にかけて、アルプスの未踏峰が地元の有力者や聖職者によって次々と登られていきます。その中でとくに勇敢なパイオニアは前回紹介したスペシアという修道士です。この時代の登山では、つるはしのようなピッケルやロープ、鉄製のカンジキがすでに使われはじめていました。

十九世紀初め、英国では、ワーズワースやバイロンが詠った詩の影響で、山がもてはやされるようになります。そして十九世紀中頃になって、いよいよ英国人がアルプスに登場します。

先鞭をつけたのは、スコットランドの科学者J・フォーブス、登山の父と呼ばれた人です。氷河に深い関心を示した最初の科学者です。一八四一年にスイスの氷河研究者J・アガシとともにユングフラウ(四一五八m)に登り、翌四二年にはヴァントフルーホルン(三三八九m)に登って、これが英国

人としてのアルプス初登頂です。

産業革命によって生まれた富裕層が観光や登山目的でアルプスを訪れるようになります。なかでも黄金時代の幕開けを告げるといわれるのが、一八五四年のA・ウイリス(英国山岳会創設者の一人)によるヴェッターホルン(三七〇一m)登頂です。ですが、それほどの高い評価を与えられる登山ではありません。

黄金時代の登山は探検的側面が強く、未踏峰が登られるにしたがつてアルプスの謎が解き明かされていくのです。そして、英国人によって登山が新スポーツとして確立されます。この時代は、最後に残された大物未踏峰マッターホルン(四四七七m)が一八六五年にE・ウインパーによって登られ、幕を閉じることになります。

黄金時代にはアルパイン・クラブ(英国山岳会 一八五七年)が創立され、一八六〇年代に大陸の国々にも山岳会が設立されました。アルプスの山々には登山道が整備され、山小屋も建てられていきます。

銀の時代に入ると、冒険的スポーツとしての登山が本格的に開始されました。この時代の特徴は、ソロ、ガイドレス、ヴァリエーション・ルートの開拓です。代表的な登山家は、A・マリーという、より困難なルートから

の登攀を実践した登山家です。その登山思想はママリズムといわれ、大正、昭和初期の日本登山界をリードした学生たちに大きな影響をおよぼしました。

銀の時代は、一八八二年のセラ兄弟によるダン・デュ・ジェアン双耳峰の南西峰(四〇〇九m)登頂によってその幕を閉じる。エポックとなった理由は、登攀のために、鉄製の鉤やワイヤを岩壁に固定するという方法をとったからです。この登山を契機に、人工登攀具をつかって困難な登攀を追求する鉄の時代に入っていきます。

二十世紀に入ると、英国の岩場と東アルプスで並行的に岩登り術が完成し、ドイツでは人工登攀具が開発されて、新しいアルピニズムの幕が開けまします。アルピニズムの担い手は英国からドイツ、イタリアに移っていきます。第一次大戦前にミュンヘンでハーケン、カラビナなどの登攀具が開発され、それを利用した新しい登山術が生まれて、アルプスで実践されていきました。

登山のフィールドは、英国人によってカフカズ、アンデス、アラスカに広がっていきます。ヒマラヤにアルピニストが登場するのは十九世紀後半になってからです。

一八八三年に登山のためにヒマラ

ヤを訪れたW・グレイアムが最初の人です。彼は前年、セラ兄弟より一カ月遅れて、ダン・デュ・ジェアンの北東峰(四〇二三m)に登頂したアルピニストで、ネパールからインドのガルワール、そしてシッキムと長い山旅をつづけ、いくつかの六〇〇〇m峰を登っています。

初期の果敢な登山の一つとしてあげられるのは、一八九五年、銀の時代を代表するママリーら三人が挑んだナンガパルバット(八二六四m)登山です。ママリーはディアミール壁の六一〇〇mまで達し、ラキオト氷河に向かったまま消息を絶つのです。前日ママリーは「あと一日がんばれば、頂上に達することができはすぞ」という言葉を残していますが、当時は高度という認識は薄く、八〇〇〇mの高峰はあまりに未知な世界だったのです。魔の山の最初の犠牲者であり、ヒマラヤ登山史上初の遭難です。

十八世紀から二十世紀のはじめにかけて、ヒマラヤをめぐる地域は、J・フーカイ、M・コンウェイ、D・フレッシュウィー、M・コンウェイ、D・フレッシュウィー、アブルツツイ公、F・ヤングハズバンド、S・ヘディンといった科学者、探検家、あるいはインド測量局によってペールを脱ぎつつありました。

アルプスで新しい登山が始まる二十世紀になると、T・ロングスタッフ、C・ブルース、A・マム、A・ケラスなどのアルピニストがヒマラヤに登場し、六〇七〇〇mの高峰を登り始めるのです。

「高槻城主、和田惟政」

福岡 努

一五六八年（永禄十一年）九月下旬、足利義昭を奉じて上洛した織田信長は、すぐさま摂津の国高槻を目指して攻め進み、権勢を誇っていた三好三人衆を追いついて芥川城に入城。第十三代将軍足利義輝を三好三人衆と謀って暗殺し、畿内の権力者となっていた松永弾正久秀をも、いとも簡単に降伏させました。同十月、足利義昭が第十五代将軍に就任。芥川城の城主には、幕府御用人の武将和田惟政が選ばれました。翌年、惟政は芥川城から高槻城へ移り、二百三十年間代々城主を継承してきた入江氏のあとの高槻城主となりました。

和田惟政は、キリスト教に対してひとかたならぬ好意を抱いており、キリシタンの布教に力を貸すのを惜しまない武将でありました。キリシタン嫌いの松永弾正久秀によって都から追放されていった宣教師フロイスを、京の二条城にて信長に引き合わせたのは、この和田惟政でした。

その当時の織田信長は、天下人になることを目指しておりましたが、仏教

諸派はどれもこれも墮落していると思われ、軽べつしておりました。それ故に、キリシタンを新鮮に感じたのでしようか、彼らのもたらした西洋の文明、文物に大いに興味を示したのでした。キリシタンを容認した信長は、キリシタンが京の都で布教できるようにと、朱印状「天下布武」をフロイスら宣教師に、よろこんで与えたということでした。

織田信長と十五代将軍義昭との確執は、信長に擁立されて就くことができた将軍職でありながら、義昭が信長を自分の家来として扱おうとしたことに起因しているといえます。天下統一という野望を抱いていた信長にとって、義昭の言うことをきくなどとは、もないことでした。

義昭は、和田惟政らを通じて信長に副将軍になるようにすすめますが、信長はこれをきっぱりと断ります。義昭は、正親町天皇の勅命をもって信長をなんとか副将軍にして、自分の部下にしようとはしますが、天皇のこの勅命さへも信長は無視します。

やがて、義昭は方々の大名に、信長を討てという手紙（御教書）を出すようになり、それが度々のことになってゆきます。このことは、信長にとって不快きまわることでありました。

大名たちは、どちらに実際の力があ

るのかよく分かっていたから、次々と、「お手紙將軍」義昭を見捨てていき、実力者信長方に寝返っていきま

す。將軍義昭の幕僚の中で、和田惟政だけは、例外中の例外であったことです。司馬遼太郎は、小説「播磨灘物語」の中で次のように記述しています。「義昭の旧幕僚のうち、能ある連中では、和田惟政の行動が例外であった。

かれはその小っぱけな高槻城を補修し、それに依り、狂気ともいふべき抵抗を信長に示したのである。援軍はなく、他とも同盟せず、まったく孤城でもって戦ったのは、一片の義気によるものであろう云々。」

高槻城のことを司馬遼太郎は「小っぱけな城」と言っていますが、信長方の荒木村重（伊丹城主）は、高槻城攻略に難渋して、「もし和田の首を取る者あらば、呉羽台（現池田氏奥邸）五百貫を賞金すべし」という高札を立てたことがあったということです。和田惟政は、このちっぽけな高槻城を守り続けたのでした。

一五七一年（元龜二年）、和田惟政は、茨木の白井河原（現茨木市耳原）の合戦で戦死しました。その戦いは凄じく、血で染まった白井河原が赤い河原になったと伝えられています。

和田惟政が命をかけて守った足利将

軍家も、惟政戦死の二年後の一五七三年（天正元年）に、信長によって最後の將軍義昭が追放されて、尊氏以来二三十年の歴史に幕を閉じました。

惟政の墓は、現在、高槻市奥天神の（①）の墓所に安置されています。この寺は、平安時代中期の女流歌人伊勢姫の晩年の住まい跡といわれています。

【問】文章の（①）に当てはまる言葉は次のア、イ、ウから一つ選んで下さい。

ア・普門寺 イ・霊松寺 ウ・伊勢寺



一五七九年に来日した日本巡察使ヴァリニャーノは、信長に謁見し、安土城が描かれた屏風を贈られたという。

芥川だより29号のクイズの答は、「ア・足利尊氏」でした。

定額給付金の使い方の一考

明石 幸次郎

昨年夏のアメリカのサブプライムローン破綻から、世界景気が悪化して、大企業の業績も急激に悪化して、日本の代表的企業のソニーまでが、正社員の削減を行うと発表するようになり、明るいニュースは新年から余り聞きません。

政治は自民党の次の総選挙を意識した政局が優先して、麻生首相が「100年に1回の深刻な事態の経済状況」と分析する割には野党の反対もありますが、有効な経済対策が即効的に打てず、その間、弱い立場の契約社員などが、派遣切りなどで失業して、職を求めてハローワークに大勢が押しかけています。その対応で、ハローワークの臨時相談員だけが即増えて、求職者の相談に当たっています。こういう対応はさすが役所です。自分たちの仕事は増やさないと言う本能的行為から臨時の職員を増員する、自分たちの職員のためだけにその対応は早いですね。求人が一向に増えない中で、臨時の窓口相談員だけ増やしても問題の解決になりませんが、兎に角、失業者の不満のやり場の窓口を増やし、相談に乗って話を聞いてやり、当たり障りの無

い助言はすると言うことだけが彼等の仕事で、失業者が仕事に就けるかどうかは、世の中の経済情勢と本人の努力と能力次第ということ、あとは自己責任である、この厚労省の出先機関の仕事は見事に完結して、目的も達成しています。しかし、失業者は一向に減らず、職に就けないという経済的不安と疎外感は失業者本人だけが、個人の問題として負っていくかねばならない現実は何ともなりません。政治は何も手を差し伸べてくれません。

麻生首相は選挙目当てで、2兆円の定額給付金をあまねく国民にばら撒いて、金持ちも貧乏人も、この金を使ってもいい、需要を拡大し、景気回復につなげたいとか（当初は経済不安や物価高騰などに直面する家計への緊急支援のためであったが）、先進国で日本が最初に経済苦境から抜け出すような対策を採るとか、この首相の言葉だけが我々の生活実感から離れ、踊っています。日本経済がバブル崩壊の長い苦境から抜け出て、去年までの好調な景気はトヨタ、松下、キャノン、新日鉄を始めとする大企業の組み立て産業、素材産業の海外向けの輸出の好調に支えられていたのが原因でした。その海外市場が落ち込んでいく状況で、世界経済と日本経済が密接に関連する現在のグローバルな市場経済で、日本だけ

がこの苦境から抜け出せるという魔法の政策は有りません。株式市場も好調であったのは、アメリカの年金基金を始めとする海外の投資家がゼロ金利の日本の円資金を借り、その金を日本株に投資して売買の利ざやを稼いでいたのが株式市場を支えていた主な原因と言われています。日本経済を支えていたこれらの要因がなくなっているのにひとり日本のみが、経済的な苦境からどうして抜け出すことが出来るのでしょうか。

今回の不況の原因は、アメリカのウォール街が作り出した金融システムがサブプライムローンというマジックを作り出し、アメリカの住宅ブームを創り多くのアメリカ人に家を建てさせ、今ある家をも買い替えさせ、更に家を担保とした過剰なローンを貸付て消費を煽り、高額な自動車、家電製品、家具などを買わせ、アメリカの好景気を維持させていました。当然日本の企業もこの景気の果実を大いに頂いて潤っていました。その間EC、産油国、ロシア、中国、日本から、高金利を餌に資金をドンドン集め、その集めた金を陽気で楽観的で何よりも消費好きの自国民をだまし、返えせる見込みの無い低所得者層にまで過剰融資を広げていった挙句、その返済の焦げつきで、このシステムの虚構が綻び、巨万の金を

投資して、証券として買っていた海外の大手銀行が回収不能に陥り、その結果、金融システムを混乱させて、それが実態経済にも及んで抜き差しならぬ不況に今や陥っているというのが現在の状況であります。

それでは、この苦境を切り抜けるためにはどうすれば良いのか？ 一部の御用経済学者は内需の拡大を図るため、従来型の公共事業の拡大を地方にまで及ぶだけの大型財政出動を取らないと大変な事になると国土交通省と一部の自民党のボス議員を喜ばすことだけを言っているが、無駄な公共事業を増やしても経済再生には繋がらず、将来に多くの借金を抱えるだけです。

政府が世論調査で78%もの反対があるにも関わらず配ろうとしている、定額給付金を有効に使うことによって、失業対策と国土の保全、食の自給率向上が図れる方策を提案します。それは、給付金が配られれば、これを一人一人が受



〔梵日記〕

死装束

けけ取るが、それを消費に回さず、その給付金を集めて、農業、森林、漁業振興基金のようなものを創設します。派遣切れなどで失業した人の中から希望者を募り、農村、山村、漁村に人材を送り込み、彼等が自立して生活が出来るまでの生活資金の一部としてその基金を当てるのです。ある程度自活できるようにになれば、彼等が作り、穫れた農水産品で返して貰おうという制度です。これは、送り込んだ人材の資金援助のみならず、受け入れ先のニーズと自治体の人的、技術的な援助がなくては成り立ちませんが、上手く行けば、失業対策と過疎化した地方の活性化に繋がる一石二鳥と、給付金を出した人のサポートも必要になりますので、我々都会に住んでいる人間にとつては、田舎に知り合いが出来る楽しみと何よりも農業、林業、漁業に対する関心と如何に地方が我々の生活を支えてくれているかが実感できる経験を与えてくれると思います。これは、政府に頼らずに国のあり方、環境問題、生活のあり方を再考しようとする多くの賛同者がいなければ、基金は出来ません。

今回の不況とこれに対する政府の無策が、国民の自立を自覚めさせ、政治に頼らず自分達で世の中を変えていく機会になれば、自分たちで良い社会が作れるのではないのでしょうか。

携帯エッセイ▼⑩

『火』

二年ほど前に、以前コートを五着ほど作った京都の客から夫婦の死装束を作ってくれないかという依頼を受けた。六十歳と若い奥様なのだが「先日、葬式があつて無地の白の死装束を仏さんに着せた。結構な値段がして、こんな着物着せるんだったら、気に入った着物で死装束を作った方がはるかに良い。と思ったので、少し若いが一番気に入っている着物で夫婦二人の装束を作っておけば、旅先で着てもいいし」と紬の着物を二点持つて来られた。

先日、友人が店に来た時に、その話をしたところ「母は、介護施設にお世話になって以来随分になる。着ている寝間着は病院のそれでいつも同じのを着ている。せめて死装束ぐらいは母の好きだった着物で装束を作つて着せてやりたい。」

母への優しさを教えてもらった。友人は「多分、自分と同じ思いの人は多いと思う。是非、皆さんにお知らせした方がいい」と言つたので当店の宣伝になります。着物を持つて来て頂きました。加工代は（ほどこ・洗い・プレス等含まず）三万円です。

高齡者が自宅の火災で焼け死んだ。そう、しばしばテレビが報じる。そのたびに母の一件を思い出す。エプロンの袖にガスコンロの火が移り、焦げた。気になったのは大きな焦げ穴になるまで気付かなかつたことだ。幸い、自分で火を消して大事には至らなかつた。

しかし、もう少し痴呆が進んでいれば自分で火は消せなかつただろう。母の自宅だけでなく、隣近所まで延焼していたら、と思うと、ぞっとした。とりあえず、母の全てのエプロンは袖を切り捨て、半袖にした。半袖のエプロンというのは何とも滑稽で悲しいものだった。しかし、すぐに慣れた。老いとの闘いは慌ただしく、感傷に浸っている暇などなかつた。

火は老人には危険なものなのだ。知人にこんな話を聞いた。

「ひとり暮らしの母親がインスタントラーメンを直接、火にかけてばやを出した。それで慌てて老人ホームに入れた」

私も火が使えなくなつた時は誰かの世話にならなければならぬ、と思つてい

俳句

義女

インド・オリッサ州を旅して――

テロあとの印度に立ちて月ながむ

早朝のブリーリー海岸貝ひらう

踊り子の激しき息や汗流る

アショカ王古代の碑文に夕日かな

ノアパトナ村の全部が織手なり

コナラク緻密な彫刻眼見張る

七頭の馬が引つ張る太陽神

編集後記

頂いた賀状の中にこんな和歌がありました。

「土を讃へ 野山遙けき 友よ来たれうたげ楽しき 賊の圍爐裏火」

囲炉裏を囲んで友人たちと盃を飲み交わす楽しい情景を思い浮かべます。

囲炉裏がもし出す温かく素朴な人情が恋しいが、マンション暮らしでは見果てぬ夢だ。

今年は「芥川だより」に投稿していただいている方の懇親会を開きたいと思ひます。どんな人が書いていただいているのか互いに話をしていただければ面白いのでは。

不景気な話が多いですが、楽しく暮らしたいものです。（嘉）

半ねりして ますます太る丑の歳

「どうぞよろしく」

きまり文句でも、そう挨拶すると気分が変わったような……。

しかし考えてみると、新しく年の変わったことをよろこびながら、どうぞ相変わらず、変わらないことをねがい。

新しくなるということは、めでたい事である。私達の生活の中で、いやな思いも、うるさいかわり合いも、すべて忘れて、新しい目で、物を事を正しく見るといことは、目出たいこと、空気までも変わったような。

他人の落ち度も、自分の失敗も皆んなが許し合って、あたたい目で眺めあえる。ここに新しい年があるのだと私は思う。

三従の教えの「老いては子に従え」を模して「老いては若きに従え」という。年をとったら何事も若い者の言うことに従ったほうがいいというのはちよつとおかしい。

私は逆に考えて「若い者のいうことも聞いてやれ」ととる。自己主張ばかりだともいえない面もわかってきた現在、生活を共にしてみても感じてきた。「自分は年老いて役に立たない」と、社会の隅によつたりし

ないで、一応耳を立てて聞いてみる。そういった余裕を持つように心掛け、頭をやわらかくしてみる努力も大切でないかな。

年をとると体力の面では若い時と同じようにはいかない。長い人生経験から培った力が必ずあると思う。

たとえば巾広い人とのつきあい方、物事の分別つけることなど一朝一夕には出来ないもの、そのようなプラス面を役立てて、若者の意見も聞き、大金や物は、大事だけれど、それだけでは解決しないことがあることを教えなければ。

愛

主人が好きだった千昌夫の「星影のワルツ」。

♪ 別れることは つらいけど仕方がないんだ君のため

♪ 別れに星影のワルツを歌おう……

♪ 声に出せば崩れそう、心の中で歌っています。

そして私を支える語句として、「あせらず あわてず あなどらず

八十餘生に、この言葉を毎日の糧として暮らしていきます。

今日まで、たくさんの“愛”をありがとう。

ペットライフの記事を見て

自分と同じ思いをしている人もいるのだなあ。我が家は4匹目のワンコ。

今度はこの目でたしかめて、納得して買ったのだから可愛さが違う。名前は「安べエー」。義士の一人の名を選んで元気で一緒に暮らしてゆこうと、決意をしたのだから少々いたずらは見逃す。自分勝手流にここんで来た。子供達から見れば、はた迷惑らしい。場所をえらばず片足をあげてサーッと一吹き、さつさと走り去って振り返ってみている。それが、可愛いのだ。

躰が出来ていないとぼやかれる。さて、これから出かけようと仕度にかかると、一品一品口にくわえて隠してしまう。軽いものでマフラー、

手袋、靴と思ったら片足がないといった状態で、毎日お先に失礼とやられてしまう。度重なると、思わず「コラッ」と声をあげると手も一発落ちてくる。その時の表情ったら、又可愛い。

留守番ばかりさせないで、「連れていってよ！」と、もの乞い表情。一日出掛けて家に帰ったらサーー大変。変な臭いが部屋に充満。又やられた、子供達の言うように、もつとキツイ躰をしないと駄目なのかなア。

愛



2月の芥川商店街の催し

☆☆☆

2月9(月)10(火)11日(水)

『春のシャツお仕立セール』

¥ 13000(消費税込み)

着物のままお持ちください

解き・水洗い・プレス・サービス

* デザインはご相談しながら

* あなたにお似合いのシルエットを提案させていただきます

着物から服を仕立てます

梵~ほん~